徒然譚

校歌作詞について

高商同窓会編集部

◆校歌作詞の経過

作詞　小川　保（おがわ　たもつ／本校国語科教諭　昭和３年赴任　千葉県出身 1969(s44).8.19 没）
作曲　梁田　貞（やなだ　ただし／東京音楽学校教授 北海道出身 1959(s34).5.9 没）
校閲　山田　孝雄（やまだ　よしお／国文学者 富山県出身 1958(s33).11.20 没）

昭和 03　作詞者小川氏が本校に赴任した頃は、校歌が制定されていなかったので、現在の第一応援歌があらゆる機会に歌われていた。

03.09　当時の伊藤彰校長より小川保氏に校歌の作詞依頼

04　校歌制定
恩師の山田孝雄博士に校閲を依頼
作曲は同僚の南里氏を介し、東京音楽学校(現東京芸術大学)教授の梁田貞氏

05.03.15　卒業式で初めて校歌が歌われた。

23.04.01　学制改革で高田商工学校は正式に「県立高田商業高等学校」と「県立高田工業高等学校」に各々分離独立した。
しかし、工業高校の新しい校歌が昭和２６年１１月２日に制定されるまでは、両校とも歌詞の一部「建設なん東洋商工日本」の部分を、「商業日本」と「工業日本」に各々若干修正し、同じ校歌を歌っていた（応援歌も同様)。
また、四番の「業」(わざ)の文字は両校に共通する文字なので修正しなかった。本校の校章に「商」が入っている事とは意味合いが違う。

＜その他参照事項＞
「六華」の読み方について ---------- 創立４０周年記念誌(昭和３０年)　校歌の思い出
「霜臺公」の文字について ---------- 商工学校校友会機関紙 学友第７号(昭和６年)
「だいえいそらうつ」等について ---- 高田工業創立７０周年記念誌(昭和６１年)参照

＜関係者紹介＞

山田 孝雄(やまだ よしお、1873 年(明治 6 年)5 月 10 日(実際には 1875 年(明治 8 年)8 月 20 日)- 1958 年(昭和 33 年)11 月 20 日)は、山田文法で有名な国語学者、国文学者、歴史学者。
独学の人として知られる。「契沖、真淵、宣長以来の国学の伝統に連なる最後の国学者」とも評される。

梁田 貞(やなだ ただし〈てい〉、1885 年〈明治 18 年〉7 月 3 日- 1959 年〈昭和 34 年〉5 月 9 日)は教育者、作曲家。北海道札幌区(現・札幌市中央区)出身。
代表作に、『城ヶ島の雨』(作詞北原白秋)、『どんぐりころころ』(作詞青木存義)

出典:フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

◆新潟懸立高田商工學校校歌

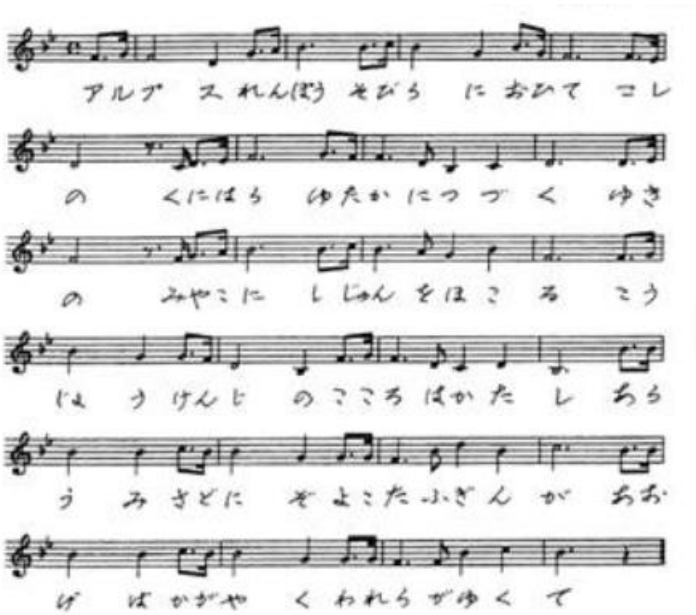
本校教諭　小川　保　作詞
文学博士　山田　孝雄　校閲
東京音楽学校教授　梁田　貞　作曲

1．アルプス連峰　脊に負ひて
越の國原　豊につゞく
雪の都に　至純を矜る
鮫城建兒の　精神は堅實し
荒海佐渡にぞ　横たふ銀河
仰げば燦く　吾等が前途

2．紫かげろふ　春日の山に
萌ゆる八千草　嘶く駿馬
若き城主の　高鳴る血潮
橡尾の勝鬨　先づ世を靡け
千曲の流れに　威名を傳ふ
霜台公こそ　吾等が亀鑑

3．黎明蓬笳は　衢にひゞき
啓示の光も　影いと清く
久遠の大旆　不撓の劒
剛健素朴の　楯振り翳し
建設なん　東洋商工日本
祖國の礎　吾等が使命

4．六華を象る　高潔き校章
「業」の一文字　不斷の錬磨
大瀛空撃つ　波すさぶとも
繚亂吹雪の　風しまくとも
建設なん　東洋商工日本
圖南の翼ぞ　吾等が抱負



◆校歌歌詞用語について

高商同窓会編集部調べ

【一番】

◎鮫城建兒の精神は堅實し（かうじょうけんじ　こころ　かた）

・鮫城……鮫ヶ城＝高田城（平城／1614 年家康六男忠輝築城）。築城時に鮫の歯（牙）が多数出土との故事による。因みに新井斐太の鮫ヶ尾城は鮫の尾が出土との故事による。

・健兒……①血気盛んな男子。勇ましい若者。②健やかで元気な子供。③こんでい（健児）

【二番】

◎橡尾の勝鬨　先づ世を靡け（とちお　かちどき　ま　よ　なび）

・橡尾……地名：新潟県栃尾市（現長岡市）。橡尾の地での戦(いくさ)。

・勝鬨……鬨（とき）は、中世の戦（いくさ、戦争や衝突）などの勝負事で勝ちを収めたときの勝ち鬨や、戦場で上げる声である。士気を高める目的で多数の人が一緒に叫ぶ声。凱歌（がいか、勝負事に勝ちを収めたときに歌う喜びの歌）とは同義あるいは一部同義とされるほど近いが、勝鬨は歌ではなく、武家兒作法の一つ。

・靡け……①なびくようにさせる。なびかせる。②自分の意に従わせる。服従させる。

◎霜台公こそ　吾等が亀鑑（そうたいこう　われら　かがみ）

・霜台……弾正台（だんじょうだい）の唐名。律令制下の太政官制に基づき設置された、監察・治安維持などを主要な業務とする官庁の一つで、古代と近代（明治時代初期）に存在した。
上杉謙信は天文 21 年（1552 年）に弾正少弼（しょうひつ／しょうすけ）に叙任とされ、後に養子の景勝に弾正少弼の官職を譲った。

・亀鑑……「亀」は甲を焼いて占ったもの。「鑑」は鏡の意。行動や判断の基準となるもの。手本。模範。

【三番】

◎黎明(れいめい)隆笳(りゅうか)は　衢(ちまた)にひゞき

・黎明……夜が明けて朝になろうとする頃。明け方。よあけ。

・隆笳……隆：隆の異体字。①高く盛り上がる。高くする。②勢いが盛んになる。
笳：声符は加(か)。もと胡人の用いた笛で、胡笳という。鼓笛、角笛
※胡人とは古代、中国北方に住む胡国の人。転じて、未開の土地の住民。えびす。蛮人。また、外国人をいう。こひと。（「胡」は古代中国北方の地）
※胡笳とは、中国古代北方民族の胡人が吹いたという、葦(あし)の葉で作った笛。

・衢……四方に通じる道。よつつじ。

◎久遠(くおん)の大旆(たいはい)　不撓(ふとう)の劒(つるぎ)

・大旆　　日月と昇竜・降竜を描いた大きな旗。昔、中国で天子または将軍が用いた。

【四番】

◎大瀛空撃つ　波すさぶとも

・大瀛……大海原
・空撃つ……空に弾丸をぶっぱなす
・波すさ(荒)ぶ……波荒れ狂う

} 大海原の波頭が天にも届かんばかり荒れ狂っても

◎圖南の 翼 ぞ　吾等が抱負

・圖南の 翼 ……出典は中国の「荘子」。(空想上の)鵬(おおとり)が南方に向かって翼を広げようとする意で、大事業を企てることをいう。若者よ大事業を企てるような夢や希望を抱け、と鼓舞している。

◆校歌の歌われ方について（商・工分離以降）

昭和２３年４月１日、学制改革で正式に「県立高田商業高等学校」と「県立高田工業高等学校」に分離された後も、工業高校の新しい校歌が昭和２６年１１月２日に制定されるまでは、両校とも歌詞の一部「建設なん東洋**商工日本**」の部分を、各々「商業日本」と「工業日本」とに若干修正し同じ校歌を歌っていた。

そして慣習として、１番・４番は商業高校、２番・３番は工業高校で歌っていた。第一応援歌も同様に分けて歌っていた。昭和２０年代の商業高校と工業高校の野球の試合などで、歌詞は違っていても、同じ曲の校歌・応援歌を歌って応援していた。

分離してすぐに工業高校の校歌が制定されなかったのは、商業課程は北城高校へ移し、工業高校だけを残す計画があったので、もしそうなれば商工学校時代の校歌が工業高校の校歌として残ることになるので、直ぐに工業高校の校歌が制定されなかった。しかし、商業高校が独立高校として残ることが決まり、商業高校に商工学校時代の校歌を残し、分離していった工業高校が新しい校歌を制定することになった歴史がある。

商工時代の応援部

校　歌（現校歌制定以前に歌われていた校歌）

一　春風秋雨平和なる　自然の御手に培はる
森の高田の若木こそ　やがては国の柱なれ

二　軒を埋めて降る雪を　天の試練と鑑みて
積るにならい徳を積み　純を至善の略とせむ

三　椰子の葉陰も馴鹿の　ゆきかう跡もなべて我が
活躍すべき市場なり　思えば重き使命かな

四　欧米の花東洋の　実も味いて枝を練り
土地の振興国の富　はかるは誰の抱負ぞや

五　南にそゝる妙高の　山より高き我が理想
学びの窓にいそしみて　歩々向上の道攀ぢむ

六　北の際なき縹渺の　海より遠きわが前途
大みことのり畏みて　疾く成功の舟泊てむ

昭和３年５月２０日発行「学友」第４号所蔵（ふり仮名は編集部付加）

◆高田と校歌作曲者 梁田 貞 との縁

小学校唱歌「羽衣」「どんぐりころころ」「城ヶ島の雨」等、約3,000曲を作曲。東京府立一中の教師をしていた梁田貞は、明治４０年、当時高田農学校々長をしていた実兄を頼って、高田に滞在していた。

下の写真は若き日の梁田貞（写真左端）と兄の家族との記念写真。真ん中にいる娘、梁田章子は近代的なセンスを身に着け、大正時代に青山学院女子部を卒業している。

出典：「ふるさとの想い出写真集 明治 大正 昭和 高田・直江津」上越郷土研究会編